

エミリーは悩んでしまった。ごまかせるような、うまい話など、なにも思いつかない。そこでささやき声でこういった。

「ちがうの。かくれんぼしているわけじゃないの。わたしたち、見つかる^{こま}と困るから、ここにかくれているの」

また数秒が過ぎた。女の子はとまどい、考えているようだった。そしてわけ知り顔でうなずくと、いった。

「三人とも、四等船室の子なんでしょう？ こんなところでつかまったら怒られるよ」

「お願いだから、だれにもなにもいわないで！」

今度はロレンツォも、そう頼んだ。

「エルナ、だれと話しているの？」

母親がちよっとこちらを向いていったが、返事を待たずにまた、おじさんたちのほうに向きなおった。ふたりはまだボンネットについて専門的な話をしている。

「ひとりでおしゃべりしてるの、ママー！ だって、すっごくつまらないんだもん」

エルナは母親にそういうと、なにを考えているのかよくわからない顔つきで、メルセデスにのった三人の顔をじっと見つめていったが、すぐににやつとした。

「そっか！ みんな、密航者なのね！」

